

徳山藩の改易と再興
 逸史
 中興秘録（全）を読む

会員 松 永 恵 子

はじめに

逸史中興秘録は、当会古文書解読研究会が昨年から今年度にかけて解読にとりくんでいるテキストである。そもそも、逸史とは正式に編纂された正史に書き漏れている史実を記したものである。徳山藩の改易と再興を記した文書に「徳山藩御還附一件」（周南市立中央図書館蔵書第二十集）がある。この原史料は天保十五年、弥益氏筆写の文書であるが、逸史中興秘録と内容がほぼ同一である。逸史中興秘録 八三頁に、奈古屋左衛門里人の日記を同族の石州津和野の奈古屋勘左衛門（里人の大叔父）が、里人の許可を得て徳山藩断絶（改易）から御出世（再

興）の箇所を抜き取り書き写し、それを宝暦十三年（一七六三）、徳山藩再興功労者の一人である玉井弥一右衛門の孫の玉井盛明が書き写し、玉井家に代々秘府したと記されている。やがて文政三年（一八二〇）、羽仁保定が玉井栄八のこの蔵書を求め得て、文政十三年盛夏、謄写したと記されている。徳山藩士分限帳の文化九年版に、玉井栄八二十石の弓持格。羽仁伝蔵、禄高五十石の馬廻り格とあり、玉井栄八は実在の人物と証明されるが羽仁保定と羽仁伝蔵が同一人物かどうかは判明できない。このことから徳山藩再興関連文書は、玉井家に秘府されて

の領有をめぐつて深刻な対立がおこり、事件後の処理について両藩の意見が対立しついに和解に至らなかつた。

時に、萩宗藩の藩主は長府藩から養嗣ようしに入った吉元。

徳山藩は初代藩主就隆の次男の元次である。元次は萩宗家と微妙な空気があり元来癩の強い性格であつた。

奈古屋左衛門里人は馬廻り格百二十石。家老奈古屋げんば玄蕃の実弟である。奈古屋家は大江姓でもともと毛利の庶流で毛利家譜代の家柄である。徳山藩、立藩の時、萩から就隆に随従し家老を代々務めていた。里人は藩主元次に諫言をするが元次は聞き入れず、里人は追放処分を受け浪人の身となり防府の向嶋に居住していた。

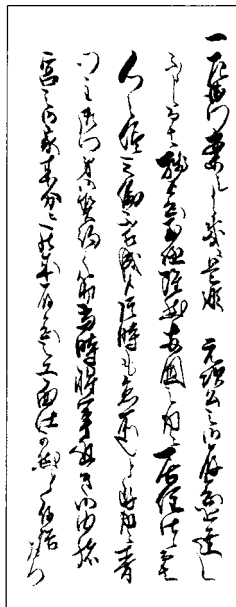
吉元はこのままでは本藩の威厳にかかわると判断し翌年万役山事件の顛末を幕府に訴え出た。元次隠居嫡子百次郎の家督相続である。ところが吉元の本意に反して幕府の下した処分は、元次の本家への不遜な態度と藩政において不行跡があつたことなどを理由に徳山藩を改易にするという厳しい裁定であつた。

享保元年（一七一六）四月十三日、徳山藩は改易処分

を受け数代続いた徳山藩はお家断絶、お取り潰しという事態になつたのである。

二、徳山藩再興を願ひ奈古屋左衛門の京都移住

史料 原文 2



一、徳山藩の事、元次公は存念を達し申さず候
ては、拙者残念至極。然ると雖も両国之内に居住仕候て
は心の俣の働き相成らず候。片時も急ぐ所なりと存じ、
内々青門主御門弟御契約の筋、当時將軍近き御由緒之宮
之御家来分に罷りなり、存念の工面仕り、可然しと存詰

解説文

左衛門案じ候所に是非、元次公之御存念を達し申さず候
ては、拙者残念至極。然ると雖も両国之内に居住仕候て
は心の俣の働き相成らず候。片時も急ぐ所なりと存じ、
内々青門主御門弟御契約の筋、当時將軍近き御由緒之宮
之御家来分に罷りなり、存念の工面仕り、可然しと存詰

幕府の徳山藩改易処分^の裁定により、徳山藩の領地は萩本藩に没収され館や藩士屋敷も解体され、嫡子百次郎と幸姫は萩に移り家老や用人も各々流罪となった。主戦論者が多かった藩論もやがて慎重論を唱えるようになっていった。

同年、将軍が吉宗に代わり老中や御用人も交代、幕府上層部は一新する。六月下旬左衛門は百姓一揆を計画。徳山領内の百姓や町人四千七百人が大挙して萩に向かうが山口永上川で萩役人に差し留められ一揆は失敗する。

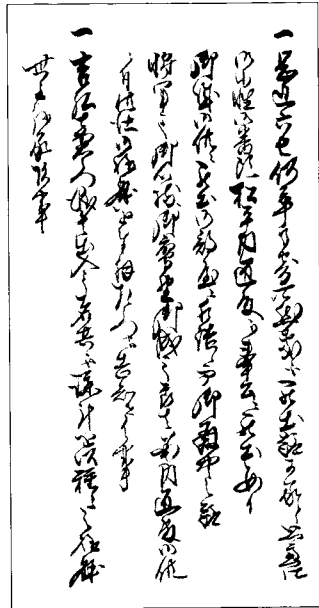
奈古屋左衛門はこのまま周防長門に居住していても徳山藩再興は永久に望みがないように思い、それならば京都へ上り幕府に直接嘆願する手立を求めるところを決心。当時青蓮院宮^{しょうれんいんのみや}から門弟の契約の話がきていた。左衛門は以前徳山藩京都周旋役として京都に在住していた時、青蓮院宮に書道を師事していたことがあった。青蓮院宮は伏見家尊祐親王で青蓮院の門跡を務め書道、青蓮院流の家元でもある。宮の妹、理子^{まさこ}内親王は吉宗の正室である。左衛門は将軍に近き^ご由緒である青蓮院宮の門弟に

なれば徳山藩再興の手立ても叶うと考え、本藩に出国切手^(手形)を申請する。然し、吉元は左衛門に少しの扶持を与えるので藩に残るよう命じた。危険分子である左衛門を自分の目の届く所に置いておこうという魂胆である。左衛門は上京の理由を持病の治療の為だと言いつて出国手形を取りつけ、享保二年三月十五日、三田尻から出国。途中讃州金毘羅山に参詣し徳山藩再興を祈願。四月四日京着。青蓮院宮とのご門弟の規式を済ませ伊勢大神宮・北野天満宮、鞍馬山魔王、比叡山^{ひがいざん}元三大師その他、霊社へ祈願成就を立願する。然し京都の渡世は凌ぎ難く武具や馬具を売り書道の弟子を取り何とか日を送った。

青蓮院の山門において、百次郎様御出世の願いを祈願、自分は牢人の身柄でお布施も思うようにならずもし願望が成就した上は、自分の身柄にかけて相応の寸志としたいとひたすら神仏に立願した。

三、徳山藩士の江戸での再興活動

史料 原文3



解説文

岡部六七、戸田仁左衛門・吉弘嘉右衛門方申遣候て、御殿中向并に御旗本町方之儀、間合わせ候事。岡部六七何卒、手寄可然所へ罷出、趣可承と思慮仕り御小姓御番頭松平内匠殿へ奉公に罷出、御部屋に相詰候て、御殿中之趣、將軍之御心持、御鷹之御成之節は、必内匠殿御供に付仕り、御様躰をば、奉拜、左衛門へ告知らさせ候事。吉弘嘉右衛門儀は、出入之者共へ謀計を以て種々之様

体世上御承候事。

徳山藩再興成就を念願する徳山藩士や有志のものも各地へと散り手立を求めて活動を続けた。元次の次女の百姫は下野鹿沼藩、三代藩主内田信濃守正偏の正室となり江戸に在住していた。

享保二年（一七一九）七月、内田信濃守の家来になっている元徳山藩士、吉弘嘉右衛門を頼り嘉右衛門の実弟、戸田佐右衛門・仁左衛門父子、岡部六七、石川藤九郎や興元寺の伴僧恵周房ら五人は、江戸に下り江戸の情報収集を行う。その情報は遂一戸田佐右衛門を通じて京都の左衛門に注進していた。又内田信濃守夫人百子も彼らの活動資金を援助した。

岡部六七は、將軍のお小姓番頭、松平内匠へ奉公に出で、毎日江戸城に出仕する内匠のお供につきお小姓部屋に詰め、江戸城での徳山藩の評判や將軍の人柄を探った。鷹のお成の時なごは、必ず内匠のお供について將軍の様子を實際に拝見し將軍の人となりうかがを窺った。吉弘嘉右衛門や

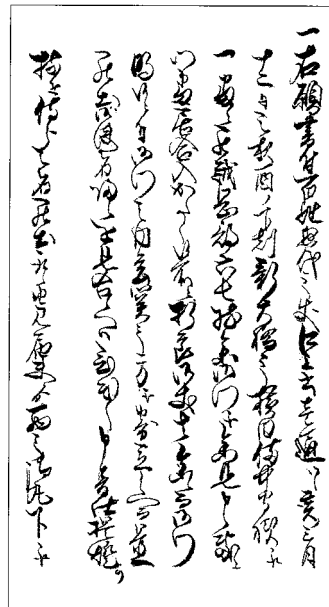
戸田仁左衛門も謀計をもつて世上に噂を流布した。京都にいる左衛門の元には、江戸の情報や徳山の情報が全て集まり、左衛門は京都にいながら全てを把握し同士の者の主盟者となり徳山藩再興の手段をめぐらし皆を導いたのである。

享保二年(一七二七)十一月、二回目の百姓一揆を計画、石川藤九郎・恵周房は徳山に下り玉井弥一右衛門を中心に準備を進める。徳山町方の古屋(中山伴七)、平野屋、谷野らを中心に富田・福川・下松・久保市、他にも三田尻や宮市・山口方面に至るまでの豪農や町人が運動資金を提供した。

然し内部者からの密告によりこの計画は頓挫した。玉井弥一右衛門は石州へ、石川藤九郎は豊前へ、恵周房は京都へ逃走。主謀者の町人四人は流罪となり豊屋新平は萩見島で病死した。玉井弥一右衛門の石州への逃走を後に孫の玉井盛明が隠秘録(周南市立中央図書館叢書第二四集)に書き記している。

四、左衛門、幕府への嘆願書を作成、江戸在住の藩士が老中らに届ける

史料 原文 4



解説文

右願書付、百姓総代之使、口上書き通宛、亥三月十日二日夜酉ノ下刻、新大橋之横田備中守様へ一番に罷越、岡部六七持参、御門へ参見申候所に門番折合せ、入がたく候所に折節、御使者参候て、御門明候に付、御門之内玄関の方へ寄立候へて置罷出、御使者帰候を見合せ候へばひそひそ申音仕り提燈を持せ侍分之者罷出、取候由見

遣之、急度、其段申渡候様に被仰出候。飛驒御免、民部

大輔兩人口上為御聞度、思召候へ共、不宣、本家大切に
思召、御意申渡候。其段、心得可有之候。

岡部六七らが届けた嘆願書は、幕府内でも話題となり特に將軍吉宗は、周防徳山百姓が書いたようになってい
るが文面からして忠義のある武士の作だと感動したと言
う。旧主を思う至誠は將軍や閣老の心を動かした。幕府
は本藩の体面とこれからの両藩の關係を重んじて、元次
の隠居嫡子百次郎への家督相続を吉元から願ひ出るよう
に命じた。吉元は幕府に徳山藩再興を正式に願ひ出した。
享保四年（一七一九）五月二十八日、幕府は元次の新
庄藩お預けの免除と百次郎家督相続を正式に許可した。
正徳五年におきた万役山事件を發端とする幕府の改易
命令が出た正徳六年から三年一ヶ月の歳月を経て、徳山
藩は再興できた。一旦お取り潰しとなった藩が再興を許
された例は、全国の大名をみても稀有なことでは例
がないと言う。翌年百次郎は元堯と改名し第四代藩主と

なる。

奈古屋左衛門はこの度の大義成就の手柄話は、一切表
に出さないように岡部六七、戸田佐右衛門・仁左衛門父
子、吉弘嘉右衛門に誓紙を交わさせ外に漏れることを禁
じた。元文三年（一七三八）、左衛門の養子、与一郎（里
智）が召し出され家名を回復したが、十月、左衛門は与
一郎を離縁し家名も断絶すると藩に申し出た。その後も
左衛門は徳山に帰らず、寛保元年（一七四一）六月十九
日、藩再興から二十三年後京都で死去。享年七十一才。
菩提寺は京都瑞泉院。徳山無量寺にも墓がある。元次
はお家再興の年の秋、徳山藩の二本榎の江戸屋敷で死去。
享年四十九歳。亡くなる一週間前功勞者の五士（奈古屋
左衛門、戸田父子、岡部六七、吉弘嘉右衛門）に感謝状
を与えた。

享保五年（一七二〇）、元堯は吉元から旧徳山藩領と
家臣の還附を受け藩を再興。以後徳山藩は本藩と良好
な關係を築き、天保七年（一八三六）、第八代広鎮ひろしげの時
四万十石の高をもつて幕府からの城主格の免許を受けた。

